

## シンポジウム 2

## シーボルトと奥平昌高

石田 純郎

新見公立短期大学

シーボルト (Philip Franz Balthasar von Siebold, 1796-1866) は、現在のドイツのバイエルン州のヴェルツブルクで生れた。学者一家であり、祖父、叔父、父がヴェルツブルク大学医学部の教授を勤めた。祖父のシーボルト (Carl Casper Siebold, 1736-1807) は、外科が技術であり外科医が職人であった一八世紀に、外科を学問の水準まで高めた秀れた外科医で、ドイツ語圏で最初に、大学の外科学教授に就任した (それまでは、外科医は外科医ギルドで徒弟奉公で養成されていた)。また彼の働きでシーボルト家は貴族となり、苗字にフォンが冠された。父 J.G.C.von シーボルトは、シーボルトが二歳になる前に没した。ヴェルツブルク大

学はシーボルト一族が多数かかっていたので、「シーボルト学校」とも呼ばれていたが、シーボルトは一八五一年一月一二日に医学部に入學登録をした。論文審査に合格して、一八二〇年一〇月九日に内科学博士、外科学博士、産科学博士の称号を授与され、卒業した。大学での教育で、医学史、動物学、植物学、人類学などの将来、日本での調査のための知識を得た。そして一年間、郊外で開業した後、父の知人でオランダ陸軍医のトップであったハーバー監察大将 (F.J.Harbaux) を頼ってオランダ陸軍に入隊し、破格の一等軍医に直ちに任命され、一八二三年八月に長崎に到着した。一八一三年までオランダはフランスに侵略され、国の基幹産業を失ってしまったので、関係のあった国の産業調査のため、大学を出た教養のある学者を各地域に送ったが、日本担当にシーボルトは選ばれ、来日した。来日後は長崎の鳴滝塾で、日本人医学者に蘭医学の臨床教育を行ない、その代償として、オランダ語で医学と直接関係の無い考古学、民俗学などの報告書を提出させ、日本にかかわる情報を集めた。また在任中二度

あつた江戸参府の途中にも、地理学、民俗学、動植物学の調査を熱心に行った。それらの情報をシーボルトはオランダに帰国後、『ニッポン』、『日本動物誌』、『日本植物誌』という大著の三部作で紹介した。江戸参府の際に、江戸の宿で蘭学やオランダに興味を持つ日本人たちと面会した。その中に中津藩主奥平昌高もいた。

江戸時代後期の日本での蘭学の普及に際して、地方の藩主が重要な働きをした例が多い。中津藩の奥平家はその顕著な一例である。三代昌鹿(一七四四―一八〇〇)は『解体新書』の著者の一人前野良沢を庇護・後援した。五代昌高(一七八一―一八五五)は出島の蘭館長ズーフからフレリック・ヘンデリックという蘭名をもらい、また自らも編集者となってオランダ語辞典『蘭語訳撰』(一八一〇年)と『中津バスタード辞書』(一八二二年)を刊行した。シーボルト著の『江戸参府紀行』には昌高の名が、日本人としては最高の二八回も記され、昌高と面会した様子が詳細に記載されている。「昌高公はオランダ人と三〇年以上も親しくし、蘭学・オランダ文化を知りたいがために四五歳で隠居し

た。江戸の宿をシーボルトは博物館のように装い、オランダ語書、ピアノ、気圧計、顕微鏡などの科学器具を、昌高公に見せたが、昌高公はたいがいの器具をすでに知っていた。昌高公は自分の時計をいくつも見せたが、その中には寒暖計付のものもあり、二人は深夜まで話しこんだ」と、『江戸参府紀行』に記載されている。直接その記載はないが、酒好きのシーボルトはオランダの地酒ジュネーバで昌高公をもてなしたかも知れない。